



- ① 今年は夜の気温が下がらず、暑さに負けてしまった苗も多く、生育に差がある
- ② ミニトマトの枝を誘引したり、芽かきをして背丈を揃えるのが腕の見せどころ
- ③ トマトの根は22度が最適な温度で、15度以下では根が伸びにくくなるそうだ
- ④ 緑色の錠剤は、コオロギ、バッタ、ナメクジなどを避けるためのもの

農業を始めて2年目、元プロレスラーの異色の農家・山上康弘さんが作るミニトマトが、へたが落ちない、鮮度の持ちがいい、おいしい、と評判を呼んでいる。

「東日本大震災があつて、ますます安心で安全な日本の食が求められています。それでも田舎からは若者が出て行く一方なので、これからは社会の役に立つ仕事をしたいと考えて、農業の道に進みました」

プロレス引退後、山上さんは農業研修センターで年間学び、郷里に戻って新規就農した。現在は、キャベツ、サツマイモ、ミニトマトを中心に約3町歩、お米を7反近く作付けしている。

「野菜づくりでいちばん難しいのが、実はミニトマトだと言われています。枝の生長スピードと実の付き方のバランスをとって、全体的に均一に、しかも収穫時期が長くなるように工夫が必要です。ミニトマトがつくれるようになったら、ほかの野菜も自信を持って栽培できると考えています」

トマトをどう栽培するのか、多くの人はマニュアルを欲しがらう。しかし、山上さんは「作業の9割は現場での観察」と言い切る。それができないと、自分が失敗しているのか、成功しているのかもわからないというのだ。

例えば、ギザギザの葉っぱをしているのは

たべものがたり

～食材と作り手の、出会いとあゆみ～



「僕は1800本のトマト苗のトレーナーなんです」と語る山上康弘さん

第2回【生産者編】

ミニトマトと山上康弘



ミニトマトに話しかけるように毎日観察しながら、小さな変化も見逃さない

ずのトマトが、丸い葉っぱになっていくは、チッソ過多の生育状態。そのほかのリン酸とカリウムが足りない理由として、今年は夜間も地温が高くて、リン酸・カリウムを吸収できなかったことが考えられるそうだ。だから、リン酸とカリウムをいくらか肥料として与えてもうまく育たない。

「すべて原因があるから結果があるんですね。それは観察しているからわかることです。正しく観察しないと、その根拠がわからず、疑問のまま終わってしまいます」

「土(環境)」「肥料の成分(栄養バランス)」と「育て方(トレーニング)」にこだわった結果、人間で言うところのスポーツマンのような力強いトマトになるのだ。トマトが立派な実を結ぶるように注意することが、最終的に消費者に喜んでもらえることに繋がる。安心、安全、健康な野菜を消費者に届けるため、山上さんは「すべてに根拠のある仕事をしていきたい」と話した。

※次回の【料理人編】では、「ミニトマト」を使った料理をご紹介します。

取材・文・写真/新井由己 協力/南っこ (P78 トマト写真)

